

STAGE CHANGE

—変化を恐れず、次のフェーズへ

今治市長
徳永 繁樹 とくなが しげき

今年2月の今治市長選挙において2期目の当選を果たされた徳永繁樹氏。1期目の4年を市民に評価され、2期目のスタートを切った。「ステージ・チェンジ」と銘打ち、実行力の高い組織改編、未来への新しい風を吹き込む5つの戦略などの今期の政策や、3月の山火事に学ぶ防災施策など、これまでの経過と今後の今治市まちづくり戦略について今治市長 徳永繁樹氏にインタビューする。

二度の選挙を振り返って

―コロナ禍中の初当選と、二度目の選挙戦、振り返っていかがですか。

【徳永】初当選時は市民の皆さんから「今治を変えてほしい」という切実な声が多く寄せられていたことを覚えています。4年前、私は「市民が真ん中」という理念を掲げ、「新しい風」を起こす決意で選挙に臨みました。当選後は、人口減少等の横たわる大きな壁を市民の皆さんとともに乗り越える覚悟を持って、選ばれた責任を日々感じながら職務に全力を傾注してきた4年間でした。今回の選挙では「STAGE CHANGE」をスローガンに掲げ、今治の未来像を市民の皆さんと共有し、まちづくりを次の段階へと進めることを前面に打ち出しました。「未来への新しい風が吹きはじめた手応えは感じています。が、まだ道半ばです。また、投票率が50%を下回ったことに関しては、深

く受け止めています。物言わぬ多数派のサイレントマジョリティの存在にも意識を向けながら、「市民が真ん中」の理念を今後も貫いていきます。

―コロナ禍中の市政スタート、ご苦労があったのではないのでしょうか。

【徳永】就任前日に主要な事業所でクラスターが発生するという、危機的な状況からスタートしましたが、今治市医師会などと連携して、安心をお届けするべく集団接種体制を構築、一方で経済支援策も矢継ぎ早に打ち出しました。マイクロツーリズムという考え方も生まれ、遠出が難しい状況下で、市民の憩いの場を創出しながら、今治が進化していく姿を示す必要がありました。そうした中で、「せとうちみなとマルシェ」の開催などにより、今治港を中心に、現在では最大で3万人、少なくとも1万人規模の方々が集まる場を創り出すことができました。



香りをしみながう
Let's
梅干しづくり

伯方の塩 がおすすめ！

- 塩かどがなく、塩味の中にほんのりと甘みを感じる塩
- しっとりタイプで梅への馴染みが良い
- 梅酢の上りが早く、実がふっくら仕上がる

梅 1 kgを漬けるのに
ピッタリの量！

小容量からのチャレンジには使い切りタイプ
伯方の塩 スタンドパックがオススメ！

伯方塩業株式会社

伯方の塩は、輸入天日塩田塩を日本の海水で溶かして原料としています。伯方の塩は伯方塩業株式会社の登録商標です。

美味しい
つくり方は
こちらから




1期目で築いた土台と課題

1期4年間で、市長ご自身が特に手応えを感じた施策、そして課題を教えてください。

【徳永】まずは、移住・定住支援と子育て支援の強化です。移住に関しては、宝島社の「田舎暮らしの本」の「住みたい田舎ベストランキング」で3年連続全部門で全国1位を獲得。これは、市民の皆さんの協力と

第5回 日本子育て支援大賞 2024 表彰式



愛媛県で初となる日本子育て支援大賞

今治のポテンシャルがあつてこそその結果です。子育てでは「今治版ネウボラ」の推進により、切れ目ない支援体制を整えました。昨年には愛媛県で初となる「日本子育て支援大賞」も受賞しています。また、経済面では「今治あきない商社」の設立による大きな果実も成果の一つです。ふると納税の寄附額は、設立前の年間10億円から2024年度には約29.4億円にまで増加しました。市内企業の販路開拓や地域経済への波及効果も非常に大きく、まさに「稼ぐ力」を地域に根づかせる第一歩となったと感じています。一方で、人口減少と少子高齢化という構造的な課題は依然として深刻です。特に気掛かりなのは、今治を離れた若者から「帰りたい」という声を聞くことです。だからこそ、帰ってこられる仕組みづくり「人口回帰に

本気で取り組む必要があると痛感しています。

「市民が真ん中」への想いを教えてください。

【徳永】市民一人ひとりが「今治家（いまばりけ）」という家族の一員であり、市長や職員ではなく、市民が主役となる市政運営を目指しています。変容を続ける皆さんの声、様々な課題を自分ごととして受け止め、多くの方々を巻き込みながら、物事を動かしていきます。私が考える「市民」とは、現在今治にお住まいの皆さんばかりではありません。今治から大きな夢を描いて都会に行かれる方もいます。遠方にお住まいでも今治を心に留めていただいている方や、F C今治の岡田武史会長のように、今治から世界を見据える方も市民だと思っています。「消滅可能都市」として2014年にリストアップされた今治市は、2024年にはそのリストから脱却できました。これには、「住みた

年の節目でもあり、「今治みらい発掘プロジェクト12」と銘打って、合併で一つになった12の地域にどんな文化や地域資源があり、どんな人がいるのかを、改めて発見・共有することができました。この取組が、次の20年のまちづくりにつながるものと確信しています。

「今治市内には丹下健三建築の他、名建築も多いですね。建築を含め、ツーリズムの今後には期待していますか。」

【徳永】今治は多種多様な観光資源を有しているにも関わらず、まだまだ観光の町とは言えません。観光には様々な切り口がありますが、建築もその一つです。丹下建築で低層の建物がこれだけ集まっている地域は、国内でもあまりありません。昨年、パリの日本文化会館で開催された、丹下健三先生と隈研吾先生による、東京五輪二大会のレガシーを紹介する展覧会に、今治市長としてお招きいただき、スピーチもさせ

ていただきました。改めて丹下先生の建築が世界的にも高く評価されていることを実感しました。8月2日からは市内を舞台に、パリの凱旋展として「丹下健三と隈研吾 東京オリンピックのレガシー展」を開催する予定です。今治市内には、丹下先生の他、隈先生の「亀老山展望台」、原広司先生の「みなと交流センター」、伊東豊雄先生の「シルバーハット」を含む建築ミュージアムもあります。今年の3月には、点在す

る建築を「点」から「線へと繋ぎ、それらを巡るモニターツアーも実施しました。今後は、建築家を志す若者たちが今治で学ぶ機会にもなればと思っています。また、建築以外にも、地域の風土や歴史、文化を料理

市民会館・市庁舎・公会堂



で表現する「ローカル・ガストロノミー」という考え方があります。今治には、全国に名を馳せるカリスマ漁師や、「さいさいきて屋」のような産直市場もあります。そうした「食」を軸としたツアーを通じて、今治の魅力をより深く知っていただくことも可能です。更に、世界のサイクリストの聖地「しまなみ海道」もあります。こうした観光資源を有機的に組み合わせ、次の4年間で新

い田舎ベストランキング」など、外部からの評価を意図的に取りにいたことが影響しています。外からの評価によつて、私たち自身が今治の魅力に気づくことができ、シビックプライドの醸成にもつながりました。「ネウボラ」は他自治体にも事例がありますが、大切なのは、サービスが市民の心に届くものであることです。また、多様な地勢である市域を5つのゾーンに分け、交流の拠点・ハブとなる公園を定めてリノベーションしたり、図書館を中心とした子育て支援拠点も整備した結果、「日本子育て支援大賞」に加え、2023年には「スポーツ文化ツーリズム賞」も受賞しました。更に、私たちは皆さんに納税いただいたお金を「賢い支出（ワイズスペンディング）」として運用するため、事業の是非について議論を重ねながら取り組んだ結果、民間で言うところの預貯金を増やし、借金も減らすことができました。昨年度は合併20周

たなツリズムの仕掛けを作っていたと考えています。

―地域資源を掛け合わせるツールとして、DXはいかがでしょうか。

【徳永】2年前、全国に拠点のあるプログラミングスクール「SUNABACO」を誘致しました。地場産業のDXを率先していただいていますし、全国のスクール生によるプログラム発表会も本市で開催され、今治を知っていただくきっかけにもなっています。また、その取組がカタチになった二つの事例として、船舶用電気機器の総合メーカー「BEMAC」と市との共同開発により、AIによって河川や水路の氾濫可能性を予測するシステムを導入しました。昨今の異常気象に備えるため、予測から得られるリードタイムを活かして、災害対策を事前に講じることが可能になります。このようにSUNABACOでのDXへの取組は、異業種の交流を生み、好事

例の横展開にもつながっています。我々もこうした活動に学び、女性活躍や多文化共生などについても、まず今治市が動き出すことで、多くの企業や団体、市民に対して、情報共有や事例の横展開が図られるようになりました。

―今治といえばタオルと造船。現在の状況はいかがでしょうか。

【徳永】「今治タオル」は品質・ブランドの両面で国内外から高く評価されていますが、原料費等の高騰と労働力不足が深刻な課題です。特に「へム縫い」と呼ばれる熟練技術を持つ職人の高齢化が進んでおり、「タオル縫製士養成所」を設立して次世代育成に取り組んでいます。また、海事産業に関しては、「バリシップ2025」の開催や、昨年度新たに策定した「海事都市今治発展ビジョン」に基づき、まち全体で世界とつながる海事都市を目指しています。

―2期目のスローガン「STAGE

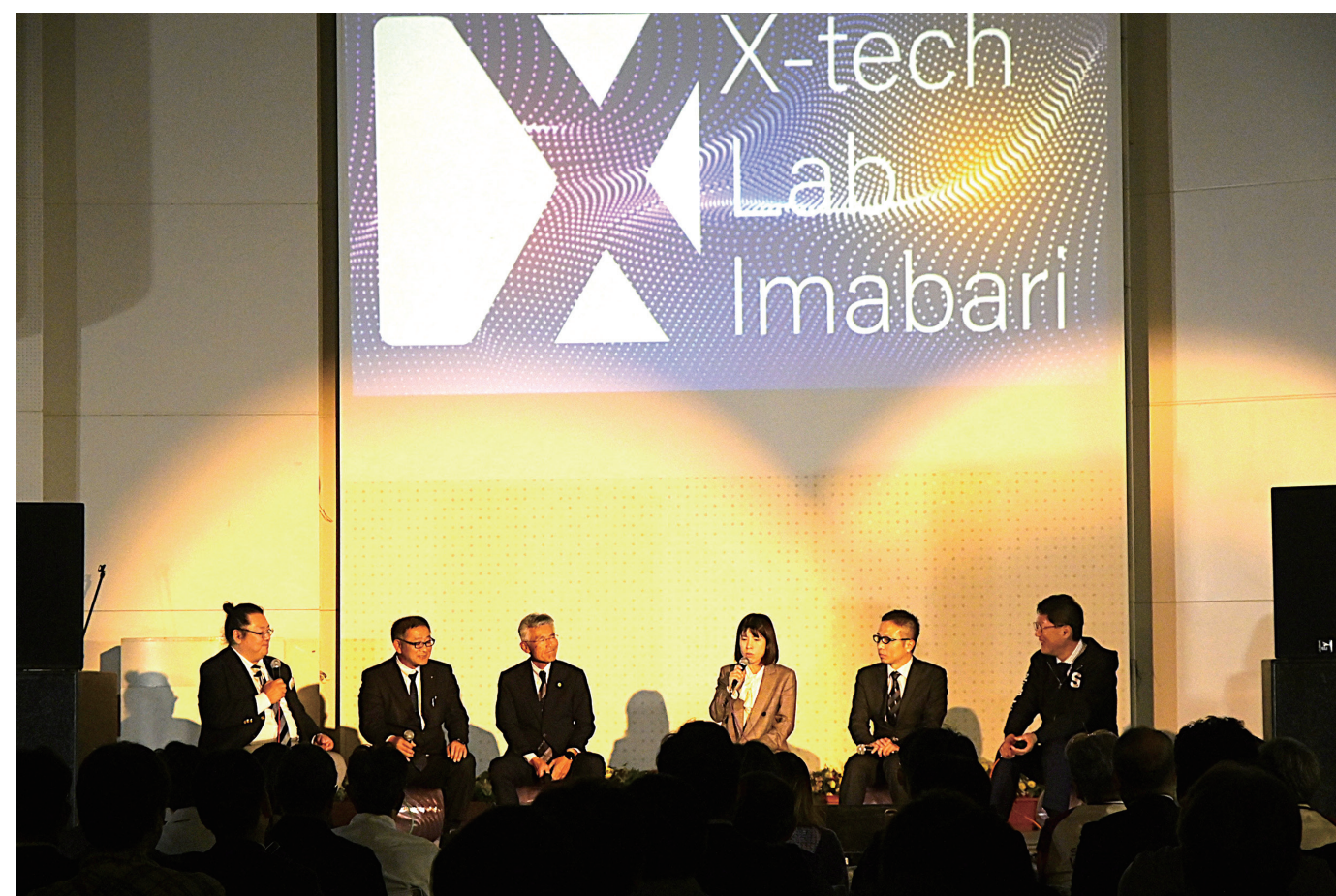


令和6年度 2期目スタート：職員の皆様を迎えられ笑顔で初登庁



タオル養成所→

バリシップ(2023年)↓



X-tech Lab imabari

STAGE CHANGE!

ステージ

チェンジ

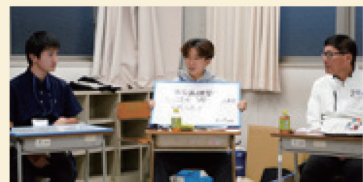
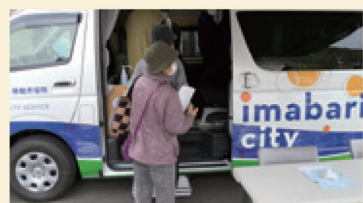
未来への新しい風 5つの戦略 概要をご紹介します



1 考動する市役所がある「まち」に

市役所は補助エンジンとして、メインプレイヤーである市民の活動をサポート。特に「Z世代」「α世代」の若者に刺さる政策を研究、実行する一方で、地域と行政の結びつきも強化して事業に取り組みます。

市民の声を積極的に拾い上げるとともに、解決策を考え、速やかに実行に移す市役所を目指します。



4 輝く「まち」に

合併20周年記念事業の取り組みを継承し、市民と共に地域の魅力発掘・発信を続けるとともに、中心市街地のリニューアルにも取り組み、今治らしいまちづくりを推進します。

しまなみ海道通行料は、通行料の負担軽減を目的に、島しょ部の生活環境の充実に取り組み、通行料“実質”無料化の実現を目指します。

2050年のカーボンニュートラル達成に向けて、地域ぐるみで脱炭素に取り組む「今治モデル」のもと、環境と経済が両立できる持続可能なまちづくりを進めます。

2 人が元気になる「まち」に

切れ目のない子育て支援事業（＝今治版ネウボラ）の拠点づくりを進め、「子育て世代が集うスポット」を目指します。

次世代を担う人材を育てるため、一人一人に合わせた教育と、英語力を高める先進グローバル教育を2つの柱に取り組みを進めます。そして、地域医療・福祉の維持や共生社会の充実に向けた事業も、地域活力に欠かせないファクターとして全力で取り組みます。

「今治へ戻ってくる人」を増やすために、このまちに「帰りたい」「関わり続けたい」と思ってもらえるような、ふるさととしての魅力を高める施策を展開します。



3 産業に活力を与える「まち」に

地域経済循環をさらに推進するため、地域企業の競争力向上をサポートします。官民連携でデジタル人材の育成、産業のDX・GXに取り組むとともに、今治あきない商社や、せとうちみなとマルシェなど経済循環を成長させる原動力を強化していきます。



亀老山展望公園のリニューアルや、「鈍川温泉郷」再生の取り組みなどによって観光誘客を図るほか、世界に誇れる「海事都市今治」を目指して、「海事都市今治未来基金」を活用した新たなみなとづくり・まちづくりを強力に推進します。



5 しなやかで強靱な「まち」に

近年の頻発する水災害や、南海トラフ巨大地震への備えを万全に整えます。

災害の被害を最小限に抑えるため、復旧・復興を迅速に進める「事前復興」の考え方を取り入れるとともに、自助・共助の「地域ディフェンス力」を高めるため、防災士の育成などに取り組みます。

5つの戦略で描く今治の未来

「掲げられた「5つの戦略」を簡単に紹介ください。」

【徳永】まずは「考動する市役所があるまち」です。市民の声に応えるために、壁突破戦略本部の設置や地域担当職員制度を整備しました。2つ目は「人が元気になるまち」です。子育て支援・教育・多文化共生を柱とし、すべての市民が元気に暮らせる地域を目指しています。

3つ目は「産業に活力を与えるまち」です。地域内経済循環を活性化させるため、X-tech Lab Imabariや農水産業のブランド化支援、観光の滞在型化などを進めています。4つ目は「輝くまち」です。中心市街地の再整備や公共交通の見直し、しまなみ海道の「実質」無料化にも取り組んでいます。そして5つ目が「しなやかで強靱なまち」です。地震や豪雨災害への備え、インフラの維持管理、防災

士の育成などを進め、市民の命と暮らしを守る体制を強化します。

「戦略的な組織改革も行われました。壁突破戦略本部」の名前に力強さを感じます。

【徳永】現場で感じたことを基に、「市民のために考動する組織」を目指して改革を進めたい。支所には「地域担当職員」を配置し、地域密着行政の実現を目指します。また、「公共空間デザイン室」や「多文化・共生社会推進室」なども新設し、今治の未来像を具現化する体制を整えてまいります。時代が変容を続ける中で、市民の要望に応えるためには、単独部署だけで対応しきれない場面もあり、その壁を突破する調整官を選任し、様々な取組を前に進めてまいります。「壁突破戦略本部」はまさにその中核であり、部長経験者や民間からの人材登用も行いました。これが次世代の中核人材

となる職員にとって良いロールモデルとなることを期待しています。人口規模については「賢く縮む」ことを考えないといけません。つまりは、人口減少傾向を緩やかにし、一定規模の人口を将来的に維持していくことが必要です。また、「ものづくりのまち」として、外国人の方々にも今治を選んでいただけるよう、多文化共生の推進は不可欠です。

併前の旧町村の役場は今も支所として存在しています。例えば島内に二つのサービス拠点をもち地域もあります。民間の発想では効率性の面から維持が難しいという判断もあるかもしれません。けれども、地域住民にとっては、今まであったものが無くなることへの不安を強く感じてしまうわけです。そうではなく、「一緒に何を創っていくのか」を、まずは地域担当職員がしっかりと考えてもらいたいと願っています。

「地域担当職員は、地域の魅力の発掘の部分にも関わるのでしょうか。」

「脱・衰退」という言葉もインパクトがあります。

【徳永】市内12の地域にはそれぞれ課題があります。地域をよく知る担当職員を配置し、課題を共有しながら能動的に解決していこうと思っています。例えば、公共ライドシェアの導入など、地域公共交通の補完に地域と連携して取り組むことも想定されますので、地域とともに営利を目的としない「副業」を容認できる制度設計も行いました。合

【徳永】全国の1,700以上ある自治体の大半が地方都市で、ほとんどが衰退の一途を辿っています。かつては多様な人々が住み、色に例えるなら多彩な色が分布していたはずなのに、まるでグレー一色になっっていく。そこから脱するための新しい考え方を、市民の皆さんに伝えるための言葉が「脱・衰退」です。

今治は国内最大の海事都市として、まだトリクルダウンの効果は持続している状態とは思いますが、それを維持するには一定規模の人口を維持しなくてはなりません。行政というのはあくまでもサブエンジンであり、メインプレイヤーはやはり市民の皆さんです。だからこそ、「脱・衰退」のために自分達に何ができるのか考えていただき、行政はその伴走をしながら、時に誘導し、後ろから支えることをしなくてはいいけない。職員には業務にあたり、安直に選択肢を選ぶのではなく、よく考えて欲しいと話しています。これからはお手本、ロールモデルがない時代です。例えば人口減少社会は、誰もが経験したことはありません。答えのない問題を考え続け、向き合う力が重要です。アンテナを高くして情報をキャッチして考え、失敗を恐れず動いて、気づき、学んで、修正しながらまた動く。役所がこの繰り返しをできる集団になればと

願っています。更に、職員には公務員として、「人の幸せに貢献する」という尊さを学んで欲しいですし、そのためにも私自身が率先垂範しなくてはと、意識しています。

―瀬戸内クロスポイント構想の展望について教えてください。

【徳永】約30億円のふるさと納税のうち、3割にあたる9億円が地域の経済循環を生んでいます。今後はそれだけでなく、今治に人を呼び込む仕掛けもしていきたい。例えば、平日は東京で働き、週末は今治で過ごすという多拠点生活も今後浸透してくるでしょう。そうした拠点の選択肢として選ばれるまちになっていくためにも、今治にご縁のある方々へ、絶えず今治の情報を発信し誘導につなげたいと考えています。市長として言うわけではありませんが、今治は普通の地方都市ではありません。「瀬戸内の世界都市」を標榜するにふさわしいコンテンツが豊富にあり、12の地域それぞれの人

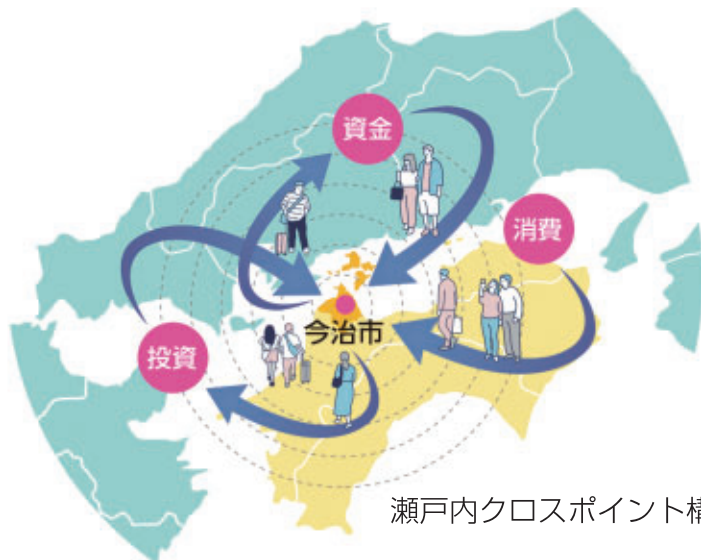
や自然も素晴らしく、中心市街地には今治の魅力を一所で体感できる場所を備える必要があると考えています。来年は全国植樹祭、2年後には世界最大の自転車国際会議「Velo-city」、さらにその翌年には国民文化祭が愛媛県で開催されます。これらのイベント来場者を地域経済循環に組み込んでいきたいと考えています。

―多文化共生も大きなテーマですね。

【徳永】子育てについて、色んな支援やサービスがあるものの日本語が難しく、どう利用するのがわからない、という意見をいただきました。こうした課題としっかり向き合うことが、外国人に選んでいただけるきっかけになります。移住者がそうであるように、自己実現のために今治に来て、「このまちはいいよ」と他の移住希望者に伝えてくれるような良い循環が起これば嬉しいです。

―外国人や移住者には、学校給食に有機農産物が出ることもアピールできるのではないだろうか。

【徳永】生産者の数が限られ、学校給食に有機農産物を一律に提供するのには難しい面もありますが、有機農業の魅力はしっかり伝えていきたいと考えています。大三島には自然農法のグループもあり、有機農法を学ぶために移住者も継続的に来てくれています。今後、今治北高校大三島分校と今治西高校伯方分校が



瀬戸内クロスポイント構想

統合され、大三島キャンパスでは高度農業人材の育成がテーマのひとつとなります。大三島には有機農業だけでなく、スマート農業や、ジビエ、ワイナリーなどもあり、島全体をフィールドとして学べる環境が整ってきています。

―島の分校には島留学する学生もいらっしやいますね。

【徳永】多感な時期を今治で過ごした島留学の生徒や、F C今治高校里山校に進学した市外出身の生徒、J F Aアカデミー今治に来る中学生たちは、将来日本や世界に羽ばたいたとしても、必ず今治に関心を持ち続けてくれると思います。昨年 F C今治高校の生徒たちと交流した際に、「高校生から市に対して事業提案する手段がない」という意見をもらい、早速今年度からそれを実現する制度を整えました。「脱・衰退」に向けたまちづくりとして、例えばアートによるまちづくりという手法もあります。高校生たち

はすでに運動会で大きな作品を作っていますので、それらをまちに一齐に飾るのも面白いと思います。Z世代やα世代の声をどう拾いカタチにしていくかが大切です。歴代市長も取り組んできた中心市街地の活性化にもあらためて挑戦します。大変難しい課題であり、このまま人口減少が続けば、チャレンジする活力さえも失われてしまうかもしれないませんが、私たちは、今ならまだ間に合うと信じています。そして、次の世代に良いまちを残していきたい。そのためには、どれだけしんどくても坂道を登っていくこうと、職員にも伝えています。

―「人口回帰」とも関連しますね。

【徳永】東京では毎年、「いまばりの集い」を開催しており、今治出身者などに声をかけて交流を続けています。昨年は232名が集まり、様々な世代の方が今治との関わりを持ち続ける大切な機会となっています。



今治市の防災への姿勢

—今年3月には大規模な林野火災も発生しました。改めて防災への姿勢をお聞かせください。

【徳永】延焼面積482ヘクタールという、平成以降、県内最大規模の林野火災でした。消防、自衛隊、近隣自治体のご協力により、人命を失うことなく鎮火に至ったのは不幸中の幸いだったと感じています。災害対応の中で、ドローンによる初動把握の重要性や、ヘリによる散水の有効性をあらためて痛感しました。今後はこうした実践的な備えを強化していきます。また、この20年で、今回の火災が発生した地区周辺では6回、大三島では5回の林野火災が起きています。雨が少なく乾燥し、強風も吹く地域であり、時期を絞つての屋外での火気使用の制限や、防災放送でその告知を徹底するような制度設計の指示をすで行っています。今回の火災では、

発生した場所から強風で1km以上も飛び火し被害をもたらしています。結果論的に、広域応援の要請をもっと早くすべきではという声もありますが、その点も含めて全体での検証が必要です。避難所は7箇所開設しましたが、私自身が生まれ育った桜井地区でもあり、避難された方々と直接顔を合わせることで安心してもらえ、要望もすぐに災害対策本部に伝え、いち早く動くことができたと思います。火災で何もかも失ってしまった事業者の方もいます。行政として何ができるのかを見出し、前を向けるよう支援していきたいと思っています。全国各地から温かいご支援をお寄せいただき感謝の気持ちでいっぱいです。いただいたお気持ちを政治の光としてどうリターンしていくか考え続けていきたい。地域防災計画も策定していますが、市の防災マニュアルの弾力的

な運用だけでなく、例えば市職員が現場に行けない場合でも、地域の方と協力して動くことができる体制づくりも必要です。リアルタイムで正確な情報をお届けする為に何が必要かも、今回の経験から学びました。昔から今治は災害の少ない地域でしたが、昨今は1時間に約120ミリの記録的短時間大雨情報が発表されるなど、激甚災害が起り得る状況になっています。地域の防災力を高めるために、機動的に動ける組織を育成し、必要な資機材を整え、具体的な連携体制を構築する必要があります。西日本豪雨では今治においても大島、伯方島、大三島が被災しましたが、甚大な被害のあった大洲、宇和島、野村などの被災状況も目の当たりにしました。これらを心に刻み、教訓として活かしていきたいと思っています。また、南海トラフ地震への備えとして、「事前復興プラン」の策定や避難所機能の強化など、想定されるリス



F C 今治高校里山校生徒による能登半島復興支援ボランティア活動に伴う林野火災義援金 寄附目録・感謝状贈呈式

クに対応する施策を地道に進めています。西日本豪雨災害の際に、被災した西予市野村町が比較的早く復興段階へ進んだのは、県と西予市とが復興計画を一緒に作っていたためという検証結果もあります。今回の林野火災で頂いた声を自分ごととして捉え、今後に備えてまいります。

世界に誇る今治の魅力

—市長「自身が考える『今治の魅力』とは何でしょうか？」

【徳永】瀬戸内の美しい風景、タオルや造船といった世界に誇る産業、しまなみ海道サイクリングや「村上海賊」などの歴史遺産、F C 今治など、挙げればきりがありませんが、何より「ものの豊かさ」と「心の豊かさ」の両方を感じられるまちであること。そこが今治の最大の魅力だと思っています。

—F C 今治の存在も大きいですね。

【徳永】F C 今治のホームタウンは東予地域一円ですが、スタジアムに来られる方々を見ると、単なるサッカーファンというよりも、何かに関わりたいと思っている年配の方や、お孫さんと一緒に観戦されている方など、そこには家族愛や地域とのつながりを感じます。岡田武史会長には「心の豊かさを大切にする文化」の種を蒔いていただきました。せとうちみなとマルシェもその一つで、多くのボランティアの方々が関わっています。あの場所に行けば、人に会える。みんな、友人や家族に会いに行く感覚なんです。私自身も、マルシェやスタジアムに何度も足を運んでいます。あの場所では、市長も幼児も、みんな同じ「市民なんです。岡田会長がよく言われるのは、「F C 今治が存続するには、今治市が存続しないといけない」ということ。その言葉がF C 今治を支える海事産業の皆さんにも伝わり、この度、今治市海事都市交流委員会を

はじめとする12社から21億6,000万円もの寄附をいただきました。市政にコミットしていただけるということは、これ以上ない喜びです。世界に影響力を持つ方々から、クルーズ船の寄港や国際会議の開催などといった提言をいただけるまちというのは、そう多くありません。そうした中で、海事産業界の声をだけ聞くのではなく、多様な考え方を尊重しながら、「市民が真ん中」という信念を貫き、一つの方向性に導いていきたいと考えています。

—海事産業では伯方島の存在も大きいですね。

【徳永】実は、伯方島の、ある海運会社の社長さんとは、市長になる前はお目にかかったこともなかったんです。激しい選挙戦を経て初当選した後、初めて意見を交わし、火花が散ったこともよく覚えています。しかし私は「誰のためでもなく、今治のために働き、伯方島に関すること

も含めて、スピード感を持って取り組んでいきます」と率直にお伝えしました。それ以来、共にまちづくりを進める中で強い絆が築けたと感じています。しまなみエリアのブランド力を牽引するのは、中央に位置する伯方島でもありましょう。そこからトリクルダウンが起こり、大三島や大島にも波及していくわけです。伯方島を訪れるたびに感じるのは、田舎特有の閉鎖的な雰囲気がないということ。若者やよそ者、女性の挑戦を邪魔しない、いわば「ガラスの天井」が存在しない地域です。

—今治市内の5つのゾーニングはそれぞれ魅力的ですね。

【徳永】たとえばネウボラ施設にしても、旧今治市街地に大きな施設を作ったとして、しまなみエリアの子ども達への波及効果は限定的です。他のサービスについても、そうした地域性をしっかりと意識しなければなりません。私自身、旧今治市

の出身ということもあり、しまなみエリアの皆さんからは、当初「島の行政は後回しにされるのでは」というご懸念もあったかもしれませんが、そうした背景もあって、1期目はしまなみ地域の振興や課題解決になり注力しました。そして、2期目となるこれからは、いよいよ今治市のエンジン部分とも言える旧市街地エリアの活性化に本格的に取り組んでいきたいと考えています。

最後に座右の銘をお教えください。

【徳永】「蔭涼（いんりょう）」という言葉を大切にしています。直訳すれば「木陰の涼しさ」。日差しの中の木陰のように、そっと誰かを支える存在でありたいという意味です。まちづくりにおいても、市民が主役であり、私はその支え手であるべきだと考えています。政治家として駆け出しの頃、壁にぶつかっていた私に、当時の加戸守行愛媛県知事からアドバイスをいただきました。私の名前

せとうちみなとマルシェ



里山スタジアム



は「繁樹」、政治家になったということとは、小木を市民の皆さんに植えていただいたんだということ。木陰ができるくらい大きな木となり、陽の降り注ぐ中、市民の皆さんに涼やかな木陰を与えられるような存在になつて欲しいと。この言葉には大変感銘を受けました。これからも、市民の皆さんとともに「誇れる今治」をつくってまいります。

——ありがとうございます。

インタビュアー 皆尾 裕

